



優秀賞〈銀の星賞〉

『影隠し』

岩手県立水沢高等学校三年 佐藤 礼菜^{あやな}

——美鈴ちゃん、こっちだよ。

空のオレンジ色と藍色^{あじいろ}が混ざり始める時間。学校が終わって、お菓子屋さんでお買い物をした帰り。学校や会社帰りの人や、お買い物をしている人、いろんな人の話し声でいっぱいになっている商店街で、私はふと立ちどまった。知ってる声が聞こえたような……。周りを見ると、スーツや制服を着た人達のすきまに、ちっちゃな白と茶色の模様が見えた。いつも世話してる、ノラ猫のミケだ。

「ミケ、どうしたの?」

駆け寄ると、ミケはちらっと金色の目を私に向けて、裏通りに向かって歩きたしてしまった。街のにぎやかさが嘘^{うそ}みたいに静かで、暗い通り。何かあるの、と聞くと、「いいから、ついてきなよ」とミケは口ひいた鳥居をくぐる。ずっと昔からあるのか、鳥居はすっかり色が薄くなっていた。こんな場所あったんだ。首をかしげながら、私は鳥居をくぐった。

その瞬間、ふっと空気が変わった。しゃぼん玉の中って、きつとこんな感じなんだろうな。今まですぐそばにあった街の人の声とか、明かりとか、みんな一気に遠くに行っちゃったみたい。冷たいつんとした空気は、花の香りがする。椿^{つばき}の花だ。ふっくらした赤色とツヤツヤの葉っぱが闇の中に浮かんで、とつてもきれいな。こんなすてきな場所があるなんて。よく見てみると地面は石畳になっていて、椿に挟まれた道はまっすぐ奥まで続いていた。ミケがするりと脇をすりぬける。

「あ、まってよー!」

あわてて追いかけていくと、ぼつぼつと黄色い明かりが道の両脇に浮かび始めた。まるで歓迎してくれているみたいだけど、私からしたらそれどころじゃない。ほんのり照らされた道を、私は一所懸命にミケを追いかけた。でも、相手はすばしこい。学校帰りで制服だから動きづらいし、あつという



間に引き放されて、私はすっかりくたくたになった。よろよろ歩いていると、しばらくして、「やっと来たのね」と声が聞こえた。明かりに照らされる、白と茶色のふわふわな体。ミケはちょこんとお行儀よく座っていた。嬉しそうにしっぽを揺らして……誰かいるのかな？

私はゆっくり近付いてみた。すると、

「おやおや、珍しいな。こんな所に人が来るとは」

少しがすれた、でも凜とした声でした。あれ、と思って目をこすってみると、明かりに照らされた闇の中に、男の人が立っていた。

真っ黒い髪に、真っ黒い着物、真っ黒い目。そこら中の闇をかき集めたみたいな人だった。足元にミケがすり寄るまま、その人は私を見てにいつと笑った。明かりに照らされた顔には目元や口元にしわがあるけど、背筋はしゃんとしているから、おじいさんなのかおじいさんなのかよく分からない。おじいさんかな。何だが、とってもなつかしい感じがした。会うのは初めてのはずなのに。なんでだろう。

「私、美鈴っていうの。その子、ミケがね、ここに来てって言うから、ついできたの」

つい嬉しくなつてにこにこすると、目を丸くされる。そしてすぐに、ふき出して笑われた。驚いたけど、おじいさんの笑っている顔を見ているうちに私も嬉しくなつてきた。

「いや、すまんすまん。お前さんがあんまり嬉しそうにするものだから、移つてしまった。ワタシはこの先にある社に住んでいる者でな、まあ好きに呼んでくれ。……そうだな、立ち話もなんだし、ついておいで」

しばらくして、おじいさんは涙を拭いながら手招きした。私はミケを抱っこして、その後についていく。何て呼ぼう……そうだ！

「じゃあ、『師匠』って呼んでもいい？」

「それはかまわんが……なんでまた」

私が横に立ってたずねると、おじいさんがきょとんとした。私はちょっと自慢げになる。

「だって、『師匠』って感じたもんー」



着物とか、しゃべり方とか、そんな感じがしたし、本当に何か教えてもらえそうな気もした。師匠はふっと笑って、そうか、とつぶやくみたいに言った。

そうしているうちに、お社が見えてきた。黒い瓦屋根で、木で出来ている。でも小さめで、寝るくらいしかできなそう。ここに一人でいるのかな？なんて考えていると、がたつく戸を師匠が乱暴に開けた。石造りの中からは明かりが漏れてきていて、師匠の後から入っていくと、ミケが耳を動かした。畳の敷かれたお座敷のところどころに置かれた燈籠が、赤や黄色にほんのり光って、影を作り出している。その奥の方から、手の平に乗るくらいの黒い人影がわんさか出てきたものだから、ミケはびっくりしたみたい。

「かわいい！ 師匠、この子達は？」

私が持っているお菓子の入った袋に向かって、びよんびよん飛び跳ねる人影達。ミケはじっとにらんでいるけど、とつてもかわいい。

「名前はないんだがな、ここに住む小さい影達だよ。少しばかりやんちゃだな」

師匠の説明を聞きながら、アメの入った袋を開ける。影の子達がじっと見てきた。

「ちっちゃな影の子達？ じゃあ……『影っ子』！ 皆にあげる！」

私はそう言うと、袋からアメをぶっさり取ってぶわっと手を広げた。赤、青、緑、ピンク……。カラフルなアメが揺らめく灯りにツヤツヤ輝く。降ってきたアメを、影っ子達はぱしっと両手で受け取った。ちっちゃな手を差し出してきて、ちゃんとハイタッチしてくれる。何だか嬉しそう。

「師匠にもあげる！」

アメの一つを差し出す。師匠は一粒、ピンクのアメをつまみあげて、まじと見つめた。口に放り込む。しばらく口の中でころころ転がして、師匠は目を丸くした。真っ黒い目がきらきらしている。

「……うまいな。それに、とてもきれいだった。ありがとさん」

師匠がふわっと笑う。私は「どういたしまして！」と大きくうなずいた。

私はそれから、師匠の所へ行くようになった。一人じゃ心配だからって、ミケも一緒についてきてくれる。師匠も影っ子もお菓子が好きみたいだから、



お菓子を食べながら、色々話すんだ。静かで、優しい感じがして、落ち着くし、師匠と話していると楽しかった。良かったことも、良くなかったことも、師匠は笑って聞いてくれる。影っ子とミケも仲良くなった。楽しい、優しい、ステキな時間。

「それでね、響也くんも不思議なお話が好きなんだって。こういうの、初めてなのよ」

今日は、クラスメートの響也くんとお話したことを話した。クラスの子達とはあんまりお話したことがなかったけど、図書室で本を読んでいたら、その本いいよね、って。嬉しかった。あんな風にほかの子と楽しくお話できたことなんて、なかったから。

「皆、お化けだとか動物がしゃべるだとかばかばかしい、変な子って。小学校の時から私のお話聞いてくれた人なんていなかったのに。響也くんは、ちゃんと聞いて、お話してくれたの。それでね、このことも話してたら、来てみたいって」

今度連れてきてもいい？ そう聞くと、ミケをなでる師匠の手が止まった。でもすぐにほほえんで、「ああ」とうなずいてくれる。胸がジンとした。ミケの丸まった体に乗っていた影っ子がぴょんと飛び降りて、ちっちゃな手を差し出してくれる。何回目かの、かわいいハイタッチだった。

「これとか、どうかな？」

お休みの日になって、私は師匠達にあげるお菓子を響也くんを選んでいった。カラフルなものが好きみたい、と私が言うのと、響也くんが金平糖の入っている袋を取った。星の形をしていて、青とか白とかあって、ぴったりだ。いいね、と私はうなずいた。よく見せてもらおうと手を伸ばして、引っ込める。前に影っ子に触った時ついたのが、指先についた黒色がどうしても取れなかったんだ。ま、そのうち取れるよね。とりあえず二人で金平糖を買って、鳥居の前に行く。響也くんが息をのんだ。

「昼間なのに、やっぱりここだけ暗いな」

「うん、でも、進んでいくと燈籠があって明るいよ？ 師匠のお社も」



私が笑うと、響也くんはお菓子の入った袋を握りなおした。そして、私達は鳥居をくぐった。ふっと音が遠くなる。進んでいくことに灯ともっていく燈籠に、響也くんはきよろきよろしながら歩いてきた。今日は猫の集会があるから、ミケはいない。影っ子はちょっぴり寂しがるかもしれないけど、響也くんがいるから、大丈夫かな。なんてことを考えながら歩いていると、響也くんに話しかけられた。

「美鈴はさ、……怖くないの?」

「なんで? 師匠は悪い人じゃないし、怖いことなんてないよ?」

私は首をかしげる。響也くんは「そっか」と言っていて、ちょっとうつむいた。

「僕、何のとりえもない『普通』なヤツだからさ、こっぴつこっぴつわくわくして、来てみたんだけど。やっぱり、……正直怖くて」

胸がズキツとした。今までもそうやって、みんな私の話を聞いてくれなかった。むしろ、なんでみんなには動物とかお花の音が聞こえないのか、お化けが見えないのか分からなかった。ちゃんと耳をすませば、見よつとすれば、仲良くなれるのに。そんなの変、不気味だって、私の話を聞いてくれない。響也くんもやっぱり怖いんだ。そう思うと、寂しくなった。……皆、私と同じならいいのにな……。

だから、と響也くんが何か言いかけた矢先、師匠の音がした。いつの間にか着いていたみたいで、お社の前に師匠が立っている。

「いらっしやい。……君が響也くんか」

「……は、初めまして。おじゃまします」

おじぎする響也くんは、師匠がにっこり笑う。お社に入って、私は、あれ、と首をかしげた。いつもは出迎えてくれる影っ子達がいらない。恥ずかしがっているのかな、なんて思ったけど、私がそれを聞く前に、師匠が響也くんをさっさと案内し始めてしまった。あわてて私もお座敷に上がる。机につくと、響也くんがハツとしたように袋を師匠に差し出した。

「あの、これ。美鈴と選んだんですけど」

やっぱり緊張してるのか、忘れてたみたい。おずおずと響也くんが差し出すと、師匠が、「何だか悪いなあ」と受け取って中身を見た。

「師匠達ラフルなものが好きみたいって言ったら、響也くんが選んでくれたのよ」



私が教えると、響也くんが「いや」と鼻を掻いた。師匠は「ありがとさんと笑った。

そして、笑顔のまま師匠が手招きした。

「美鈴、おいで」

何だろ。不思議に思いながら師匠の横に座ると、ぐいっと手を引っばられた。ちょっと痛くて、顔をしかめる。

「ううん……やはりか」

私の手を見て、師匠がうなる。文句を言おうとしたけど、あんまり難しい顔をしているから不安になった。どうしたの、と聞くと、師匠は手を離して前髪をかきあげた。

「……影っ子達がつけた印が消えかけている。お前さんのせいだな？」

そう言っ、響也くんをにらむ。よく分からない。引っばられた方の手をよく見てみると、影っ子とハイタッチしていた指先の黒が薄くなっていた。でも、印って？

「……何の話ですか？」

響也くんもきょとんとしている。それには答えずに、師匠は私の肩に手を置いて笑った。

「美鈴はこの場所が好きなんだろう？ だがな、響也くんは違っみたいだぞ。

……そうだ、せっかくだから今日は昔話をしよう」

師匠がそう言って手を叩いた瞬間、部屋の灯りが弱くなった。影が濃くなっ、その中に突き飛ばされる。何が起きたのか分からなくてとりあえず起き上がるうとすると、ぐっと服を引っばられた。影っ子達がぐいぐいと私を引き止めている。それを見て驚く響也くんと私に、師匠は歌うように話を始めた。

昔々、この辺りは村で、大きな森があった。その森はうつそうとしていて、いつも薄暗かったから「影の森」と呼ばれてみんなに不気味がられていた。この森には「影」がいて、ひっそり村を見守っていたが、あんまり人が近寄らないから、だんだん寂しくなった。そして、村の人をさらうようになった。友達がほしかったのだ。一所懸命もてなしたが、怖がられて、結局友達はできなかった。村の人達は怒り、森の中にとらわれていた人達を取り戻した。しかし、その人達から「影」の話を聞くうちに、かわいそうになっ



た。森にお社を建てて、みんなで感謝するようになった。「影」も村の人も、仲良くなった。お互いのことを知って、幸せになった……。

「やがて村は街になった。それこそ、社のことなど忘れ去られるくらいの時間^{かん}がたってな。誰も社のことなど考えない。だから、何かと良くしてくれた美鈴の願いを叶えようと思ったのさ。昔さらった者の中には、森の方がいいと言っ^{かな}てもべにな^{かな}った者もいたからな」

響也くんが目を見開いて私を見た。でも、私だって師匠が何を言っているのか分からない。首を振る私の顔を、師匠がのぞきこんだ。真っ黒い目が、一瞬悲しそうに揺れた。

「それで影っ子が同じ仲間だという印をお前さんにつけたのだがな、響也くんのせいか、お前さんの『ここにいたい』という気持ちが少しばかり薄くなってしまった。そんな中途半端じゃあ、ワタシ達と同じにはなれない」

「……師匠、だっけ。師匠がその話の『影』だとも言いたいのか？ 結局、師匠は美鈴や僕をどうしたいのさ？」

響也くんが眉をひそめる。師匠はゆっくりと響也くんの方に体を向けた。「せっかくここを訪ねてくれたのだから、ずっといてもらわないとな。人が来るなんて、めったにないのだから」

どうしよう。響也くんを巻き込んでしまったし、影っ子達は嬉しそうだし、どうしたらいいか分からない。響也くんが口を開いた。

「……悪いけど、ずっとここにいるなんてできないよ」

「ふうん？ だが、お前さんに何ができる？ 取り立てて何もなさそうなお前さんに」

師匠が響也くんに近づく。響也くんが尻もちをついた。その目は不安そう^で、私は気付いたら「違うよ！」と叫んでいた。

「何もないなんて、そんなことないよ……、響也くんは私とお話してくれた、優しい人だもの。ちゃんと話を聞いてくれた人なんて、今までいなかったの^に。私、とっても嬉しかったんだよ」

響也くんが驚いたように私を見る。私はそれにうなずいて、そしてぞっとした。寒い。見ると、影っ子がひざに乗っていた。お砂糖を焦^こがしたみたい^に、その部分がじんわりと黒くなっている。師匠が私の前に立った。

「本当にそう思っているのか？」



かがみこんで、じっと私の目をのぞきこんでくる。その目に吸い込まれるような感じがして、私は何も言えなかった。燈籠の灯りが消えて、だんだんお座敷が暗くなってくる。師匠は立ち上がると、静かに笑った。

「嬉しいなど言っているが、本当は寂しいんだろう？ 響也くんは美鈴とは違う。ここに来る時も、お前さんとは違って怖がったんじゃないか？」

そうだ。響也くんは優しいけど、怖がってた。ほかの人達と同じ。また、灯りが消えた。

「ワタシにはお前さんの寂しさがよく分かる。だがな、ここにいれば、ワタシ達と同じになれば、もうそんな思いはしなくてすむんだよ。なにせここは、皆同じなのだからな」

ここにいれば寂しくない。師匠の言葉はすごく優しくかった。師匠は私のこととを分かってくれる。ここを出る意味なんてないんじゃないのかな……。体の真ん中から冷えていく感じがして、気付くと、手やひざだけじゃなく体全体が黒くにじんんでいた。ちよつと寒いけど、皆同じ、真っ黒に塗り潰されていくと思うと、何だかほつとする。皆、皆一緒。私がつなずこうとした瞬間、何か光が目に入った。

「皆同じって……さっきから聞いてれば、何だよそれ。確かに、僕と美鈴は違うけど」

響也くんの周りだけ、明るくなっていた。燈籠は消えていつてるのに、どうして？ 私はまぶしくて目をそらした。

「……やめてよ。そんなの、聞きたくない」
うつむく私に、響也くんは話を続けた。

「違うけど、だからこそ美鈴のこと、すごいって思うのに。僕さ、自分なんて、何のとりえもないつまらないヤツだと思ってた。だから、皆が怖がるようなものも大切にできる美鈴がうらやましかったんだ。でも、さっき美鈴に言われて初めて、自分にもいいところがあるって気付けた。美鈴が教えてくれたんだ。……一人じゃないんだ、大丈夫だよ」

小さく笑って、響也くんは手を差し伸べた。響也くんがそんな風に思ってたなんて、思ってもみなかった。ずっと、皆と違うことが寂しかった。でも、柔らかい光に、体を包む影が溶かされていく。恐る恐る手を伸ばそうとした



瞬間、肩を強く掴つかまれた。すぐ耳元で低い声こゑがする。優しく、少し寂しそうな声。

「ダメだ、そんなものはただの気休めだ。自分と違う者がいる限り、ずっと寂しい思いをするに決まっている。ここに残れ、美鈴」

胸がキュツとした。涙が出そうになるのをこらえて、私は精一杯笑った。「師匠、ありがとう。師匠や影っ子達かげっしといて、とっても楽しかった……でも、ごめんね。私、がんばってみたいの。ちゃんと分かってくれる人がいるって、分かったから」

影っ子達が離れて行く。体の影は、すっかりなくなっていた。少しして、肩を掴んでいた手がゆっくりと離れる。

「ねえ、師匠……」

「……もういい、勝手にしろ。ただし、お前さんはこの場所にふさわしくな
くなつたのだからな、もう二度と来るんじゃないぞ」

響也くんの手を取って、立ち上がる。私は目をつぶって、しっかりとつなずいた。

鳥居をくぐると裏通りに出て、さわやかな風が髪をなでた。おかえり、という声と一緒に、ミケが足元にすり寄ってくる。私はその体を抱っこした。ふかふかで、あったかい。

「美鈴、今のって……夢とかじゃないよね」

ぽつりと響也くんがつぶやいた。でも、私は答えられなくて。響也くんはそんな私を見てぎょっとした。

「美鈴、……泣いてるの？」

何か答えなきゃ。そう思うのに、何だか胸が痛かった。そうだ、師匠のこ
と……。

「……夢なんかじゃ、ないよ。師匠はね、私達をあつ場所から出してくれたんだと思うの。響也くんからしたら信じられないかもしれないけど、師匠は
とつてもいい人だから……だから……」

大丈夫？とミケが小さく鳴いた。その体をそつと抱きしめる。そうだ、ミケが連れてきてくれた場所だし、昔から一緒のこの子が怖い場所に私を連れてくるはずがないんだ。きっと私が寂しいのを知ってて、連れてきてくれた



賢治のまちから
高校生☆童話大賞

んだ……。私が必死に涙を拭っていると、響也くんは「そっか」と小さく笑ってハンカチを差し出してくれた。

「……ありがとう」

受け取って涙を拭く。真っ白な太陽の光が差し込んで、地面に淡い影が落ちた。私は鳥居を振り返った。響也くんが首をかしげる。

「どうしたの？」

「ううん、なんでもない。……もう行こう」

鳥居の奥の森には、太陽の光を浴びて、優しい影が静かにたたずんでいるのが見えた。